

じっきょう 家庭科資料

(通巻 60 号)

みんなで家庭科を

No. 45

巻頭

手ぬぐいを使って作る、毎日使える小もの

もくじ／

手ぬぐいを使って作る、毎日使える小もの

～「あずま袋」と「ブックカバー」～ …………… 1

「改正育児・介護休業法」から父親の育児を考える …………… 8

「水が漏れない紙袋」でエコな暮らしへ …………… 14

手ぬぐいを使って作る、毎日使える小もの ～「あずま袋」と「ブックカバー」～

越膳夕香

◆はじめに

みなさん、「手ぬぐい」持っていますか？ 使っていますか？ 私は、いまこの原稿を書いているときにも、伸び過ぎた髪の毛が邪魔で「けんかかぶり」という巻き方で頭に巻いています。温泉に行くときにはもちろん、アウトドアでパーベキューなどというときにも持って行きます。手を拭いたりするだけでなく、寒くなったら首に巻けますし、食材を包んだりもできます。着物で出かけるときには袂に忍ばせます。ときには半襟としても使います。私の手ぬぐい収納用の大きな四角いバスケットは、すでに蓋が閉まらなくなるほどぎゅうぎゅうだというのに、季節の新柄や、旅先で地域限定のものなどを見かけると、ついつい買ってしまいます。おまけに人からいただいたりすることもあるので、増える一方なのが悩みの種です。しかし、ときどきそのバスケットを開けて、広げて眺めるのが楽しみでもあります。

そんな手ぬぐいの魅力と、手ぬぐいを使って作る小ものについて、お伝えしたいと思います。

◆手ぬぐいの歴史と用途

手ぬぐいの起源は鎌倉時代とも言われていますが、もっと古く、もともとは、神仏の清掃や神事の際に身を清めるために使われていた布が原型という説もあるようです。神聖な道具のひとつだったのですね。その名残か、いまでも地方に伝わる古いお祭りや踊りなどで、手ぬぐいが重要な小道具になっているところがあることでしょうか。とはいえ、庶民はまだ粗末な麻の着物を着ていた江戸時代以前、布はたいへんな貴重品で、木綿は高級な輸入品でした。国内で木綿が作られるようになり、一般に普及したのは江戸時代になってからのようです。それまでは反物でしか売られなかった布を、必要な分だけ切って売るスタイルが生まれたことなどから、だんだんいまのような手ぬぐいの形になり、庶民の生活に欠

かせない日用品となっていったようです。

さらには、歌舞伎役者が名前や家紋などを染めた手ぬぐいを名刺代わりに配ったことから、流行アイテムとしてますます広まったとか。歌舞伎では、被り方で身分を表現したりする舞台の小道具としても使われています。実際、江戸時代には、年齢や性別によって、また、職業によっては日よけや塵よけなどの必要から、さまざまな手ぬぐいの被り方が編み出されたのだそうです。時代劇や浮世絵を観るときに、手ぬぐいに注目すると面白い発見があるかもしれません。そういえば、下駄の鼻緒が切れたときの応急処置に、手ぬぐいを裂いて挿げるシーンはよく見かけますね。落語でも、手ぬぐいを財布や湯呑みなどに見立てて、噺にリアリティを添える小道具として使われています。

庶民の日用品としての手ぬぐいの用途はとても幅広いものでした。銭湯が普及したのも江戸時代のことですが、身体を洗ったり拭いたりだけでなく、お風呂道具を包んで持ち運ぶものとして風呂敷のような役割も果たしていました。また、家庭の台所では、布巾や調理道具としてはもちろん、帯に挟んで前掛けにしたり、着物の衿にかけて汚れを防いだりと、身につけるものとしても使われていました。やがて、染めの技術の発達とともに、実用品でありながら、粋でおしゃれな装身具としても、さまざまな意匠が生み出されていったのでした。

そして、何度も洗って使い古した手ぬぐいは、細く裂いてハタキにしたり、最後には、おしめや雑巾にしたりと、大切に使い切ったのです。

『無印良品』に、カットできるラインが入った「その次があるバスタオル」という商品がありますが、最初はそのままでバスタオル、次はバスマットに、最後には雑巾として使い切る、というコンセプトは、手ぬぐいに通じるものがあると思います。

バスグッズ、掃除道具、調理道具、ファッションアイテム、ラッピンググッズ、インテリアグッズ、名刺などなど、手ぬぐいの使いみちは数知れずあります。風呂敷と並ぶ、いや、むしろ風呂敷よりも活用範囲の広い、日本人の知恵が詰まった万能布なのです。

◆手芸の素材としての手ぬぐい

そのままでもこれだけ使いみちが豊富なのですから、アイデア次第でいろいろなものを手作りする

素材としても万能です。要は、幅の狭い平織りの薄手木綿布（晒）ですから、扱いやすく、アイロンもしっかり利きますし、ミシンでも手縫いでもどちらも適しています。

手ぬぐいとして使う場合には、まず水通しをして乾かしてから使います。洗うときには洗剤やお湯を使わず、水だけで手洗いし、形を整えて干します。裁ち端はそのままで、だんだんほつれてくる横糸をハサミで切り揃えながら使っているうちに、いい感じのフリンジになってきます。そうして何度も水をくぐらせているうちに、少しずつ色も落ち着いて、こなれた感じになってくるのです。吸水性や柔らかさが増し、肌触りもよくなります。まるでデニムのように「育てる」楽しみもある素材なのです。

ということは、つまり、縮みや色落ちもあるということです。手ぬぐいから何かを作るときには、特に濃色の場合や、裏地をつける場合、正確なサイズに仕上げたい場合には、あらかじめ水通ししたほうがいいでしょう。特に、手縫いするなら、先に水通ししたほうが針の通りもよくなります。

ただし、ミシンで縫うならば、折目目をアイロンで伸ばす程度で、糊を落とさずに縫ったほうが扱いやすいかもしれません。これからご紹介する「あずま袋」をミシンで縫う場合には、私はそうしています。一重仕立てなので、色移りの心配もなく、洗濯によって多少縮んでも困らないからです。

裁ち端は歪んでいることもあるので、できれば横糸を抜いて地直しをするのが望ましいのですが、生地地の目と柄の付きかたが合っていない場合もあるので、そのあたりは臨機応変に考えましょう。手ぬぐい1本のサイズは、だいたい1尺×3尺（幅33～35cm×長さ90～100cm）。製造元によって若干の差はありますが、1反（12m前後）の晒から10～12本くらいに切り分けるようです。つまり、短いほうの辺は切りっぱなしですが、長いほうの辺は、両側とも耳になっています。ここを上手に利用すれば、裁ち端の始末なども必要ありません。

手ぬぐいを染める方法には、おもに、防染糊を置いた布に染料を注いで染み込ませる「注染」と、布の上に型紙を置き色糊を刷り込んでいく「捺染」があります。この染めの方法によっては、表裏がはっきりしているものもありますが、表裏を気にせず両面使えるものも多く、作るアイテムによってはこれも便利な点です。

価格も、1枚1,000円前後とお手ごろです。とはいえ、90cm幅や110cm幅で、1m1,000円以下の木綿の布などいくらでもありますから、そう考えると、じつはちょっと割高です。しかし、だからこそ、好きな色柄のものを1枚手に入れたら、ハサミを入れて何かを作るにしても、無造作に裁ち落としを捨てることなく、全部無駄なく使い切ろうという気持ちになるものです。

◆いちばんの魅力は、色と柄

手ぬぐいのいちばんの魅力は、なんといっても豊富な色柄の楽しさにあります。格子や縞、麻の葉、豆紋りなどといったベーシックな古典柄から、植物や動物、野菜や果物、行事などをモチーフにした季節感溢れる柄が各店から多数出ていて、そのネーミングもまたそれぞれに面白いです。1枚でそのままタペストリーとして飾れる絵手ぬぐいのようなものもありますが、手作りの素材としては、細かめの小紋柄が扱いやすいかもしれません。しかし、お気に入りの1枚を見つけて、楽しみながら作るのがいちばんだと思います。

有名店ばかりなので、ご存じのかたも多いことでしょうが、おすすめの手ぬぐいのお店をいくつか挙げておきます。インターネットで探してみればほかにもいろいろ見つかりますし、各地にショップを展開しているところ、通販に対応してくれるところもたくさんあります。見ているだけで楽しくなり、欲しくなりますよ。

かまわぬ <http://www.kamawanu.co.jp/>
 濱文様 <http://www.hamamo.net/>
 戸田屋商店 <http://www.rienzome.co.jp/>
 染の安坊 <http://www.anbo.jp/>



縦横の比率が3:1ではなく横の方が長い場合、そのまま作るとこんな形になるが、結んでしまえば気にならない。



『かまわぬ』の「あられ」という柄。黒地にベージュのランダムなドットには水玉模様とは違う魅力がある。

◆おすすめアイテムその1～あずま袋～

両サイドの耳を生かし、手ぬぐい1本を丸ごと使って作るアイテムとしておすすめしたいのが、この三角形の袋です。あずま袋（東袋）、あづま袋（吾妻袋）また、みゆき袋、室町袋などと、いろいろな呼称があるようで、いったいどれが本当なのか、少し調べてはみましたが、正確な答えは得られませんでした。もし、ご存知のかたがいらっしゃいましたら、教えていただきたく思います。ここでは「あずま袋」と呼ばせてもらいます。

発祥は、これまた江戸時代と言われています。1枚の風呂敷を切り分けて作ったり、着古した浴衣や着物から作ったりしていたようです。風呂敷の進化形としてのアイデア・グッズですね。布を大切に使うという江戸庶民のリサイクル&リユースの精神が感じられます。

私も実際に何枚も自作のものを持っていて、日々活用しています。ふだん使いのサブバッグとして、浴衣のときなどはメインのバッグとして、また、カゴバッグの上に目隠しとして載せるのにも重宝ですし、旅のおともにもおすすめです。

「あずま袋」は、横1：縦3の比率の長方形に、外周の縫い代分をつけた布であれば、どんな大きさでも作れます。実際にやってみればすぐわかることなのですが、この畳み方について、図を見ただけでは理解できない人も多いようなので、そういうときはまず紙を折って実験してみるといいと思います。

ところが、おすすめアイテムと言っておきながら恐縮な話なのですが、手ぬぐいの製造元によって、この横1：縦3の比率に当てはまらない場合も多いのです（『濱文様』の「長てぬぐい」は35cm幅×

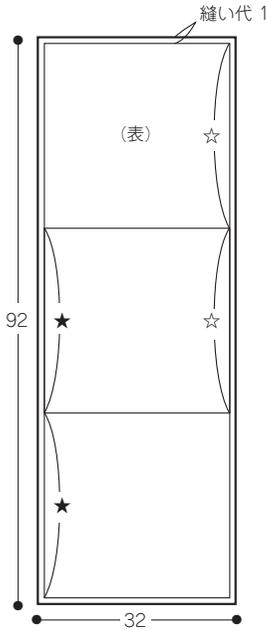


小さなバッグの中にも畳んで収納できるのでサブバッグとして最適。



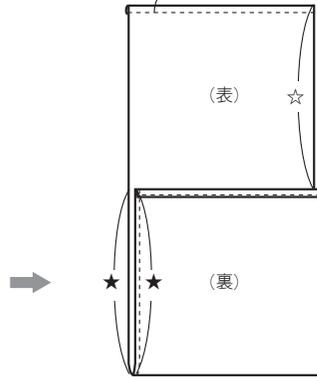
細々したものを中に入れてカゴの上ののせれば荷物の目隠しとしても便利。

④ みんなで家庭科を

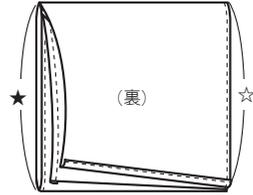


一辺が30cmの正方形3つ分
つまり横30×縦90cmに
縫い代1cmをつけた形。
これだときれいな左右対称の形
のあずま袋ができる。
長尺の手ぬぐいや浴衣地などからだったら、
このような取り方も可能。

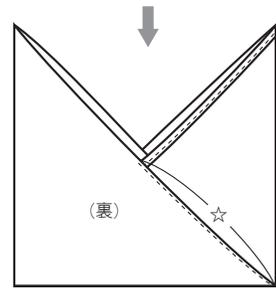
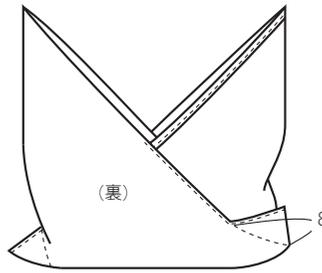
短辺を三つ折りして縫う。



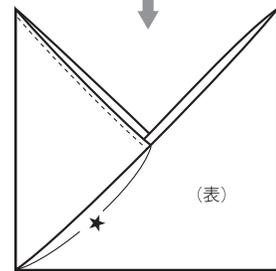
★と★、☆と☆を中表に合わせて縫う。
3つ並んだ正方形を上から1、2、3とすると
図では、★は2と3、☆は1と2を合わせているので
出来上がったときy字型になるが、
★を1と2、☆を2と3という合わせ方になると
逆y字型になる。
柄によっては、どちらがいいか検討が必要な場合も。



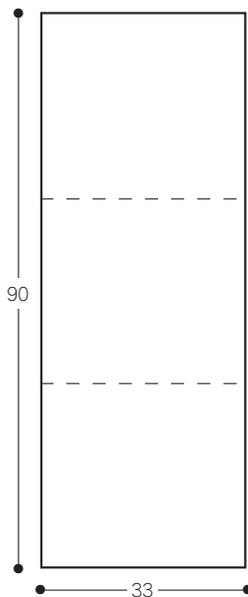
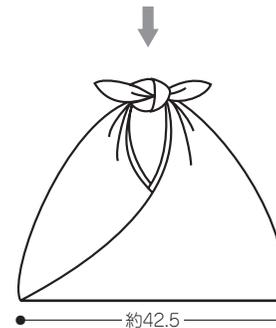
まちをつきたい場合は、底の部分を
図のように三角につまんで縫う。
7~8cmくらいが適当。



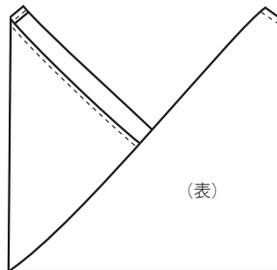
広げるとこうなる。



表に返してできあがり。



一般的な手ぬぐいのサイズ(33×90cm)
だと、長辺を三等分した長さが
短辺よりも短くなるため
そのまま作るとこのような形になるが、
使うのに特に差し支えはない。
柄を損なわないようであれば、
長辺の★と★、☆と☆を縫い合わせるときに
縫い代を多目にとることで帳尻を合わせ、
上部の余分な縫い代は裏側に折り込んで
まつるか、短辺の縫い目と繋げるようにして
ミシンをかければ、左右対称の形にできる。





著者愛用中の手ぬぐいで作った、あずま袋。
手前の2点は、まちなし、奥の3点は、まちつき。

110cmなので、まあ、ちょうどいいのですが)。たいていは、幅をいっぱい使うと長さが足りなくなり、きれいな左右対称の形にならないのですが、そこは堅苦しく考えず、手ぬぐいの柄を生かす方法で調整しましょう。

もし、和裁を教えていらっしゃるなら、三つ折りするところで、くけ縫い、★や☆を縫い合わせるところで、運針の練習をしてもいいと思います。手縫いで作った場合には、縫い目をすっとほどくだけで、手ぬぐいに戻して使うことも簡単にできます。

◇作り方の手順

- ① まず短辺を三つ折りして縫います。使うときに結ぶところですから、なるべく細めに仕上げたほうがすっきりします。私はいつもだいたい5mm幅くらいで折って端ミシンをかけます。
- ② それから長さを三等分して畳みます。定規で測らなくても、耳の部分だけにアイロンで折り目をつけて、それをしるしにすれば簡単です。
- ③ 長辺の★と★、☆と☆を中表に合わせて縫います。耳どうしを縫い合わせるので、布端をきちんと重ね合わせておけば、ぎりぎりの3mmくらいのところを縫っても大丈夫です。縫い代は2枚ともアイロンで上側に倒します。底を7～8cmつまんで縫い、まちを作っても使いやすいです。

◆おすすめアイテムその2～ブックカバー～

もうひとつ、身近に使えるアイテムとして文庫本

サイズのブックカバーをご紹介します。この場合は、手ぬぐいの一重仕立てではちょっと頼りないので、裏地をつけます。裏地は、手ぬぐいどうしの組合わせでももちろんOKですし、厚みや質感などのバランスがよく色数も豊富なカラーシーチングなども適していると思います。

文庫本のサイズは版元によって微妙に異なりますが、開いたときのできあがり縦16×横23cmで、だいたいどこのものにも、厚さ1cm程度の本であれば対応します。分厚い本にかけたい場合には、もう少し横を広めにとってください。

せっかく自分で作るのですから、栗用の紐をつけておくと便利です。これも版元によっては、本についていることもありますけれどね。私は、4mm幅のスエードテープを使うことが多いですが、細めのリボンやレースなどでもいいと思います。手ぬぐいの色や柄に合わせて、個性を主張できるオプションでもあります。

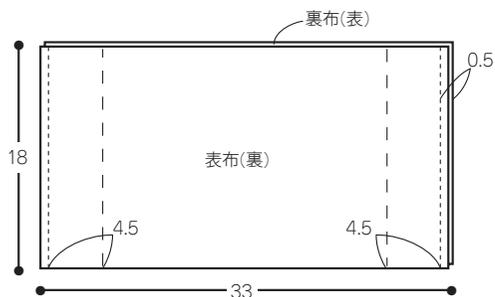
もちろん、同じ方法でサイズを変えれば、もっと大きな本やノートのカバーも作れます。このとき、もしも半端に細長い布が余ってしまうようなら、栗紐をつけるのをやめて、余り布に厚紙などを裏打ちして、お揃いの栗を作ってもいいでしょう。

手ぬぐいの柄の向きにもよりますが、文庫本サイズのカバーなら、1本から4～5点作ることができます。柄の向きが気にならないのであれば縦に5枚とれますし、横向きの柄付けであれば4枚とれます。平織りなので、縦地でも横地でも平気です。1本を分けて友だちどうしでお揃いのものを作ったり、プレゼントにしても喜ばれるでしょう。そうしてたくさん本を読んでほしいな、と思います。

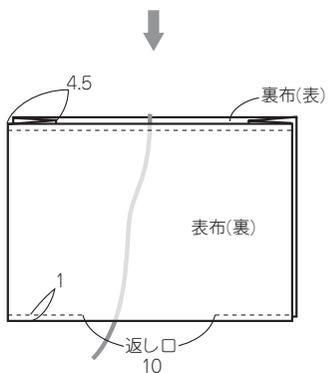
◇作り方の手順

- ① 表布、裏布を裁ち、中表に合わせて両脇を縫います。縫い代はアイロンで割っておくか、いったん表に返し、表裏をきれいに突き合わせてアイロンで整えておくこと次の作業がしやすいです。
- ② カバーの折り返し分を内側に畳んでアイロンで押さえます。天の中央に栗用の紐を挟み、返し口を残して天地を縫います。
- ③ アイロンで縫い代を表側に倒し、返し口から表に返して、アイロンで整えます。返し口をまつつととじます。

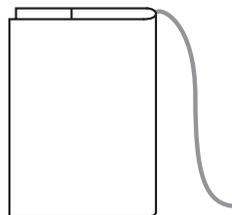
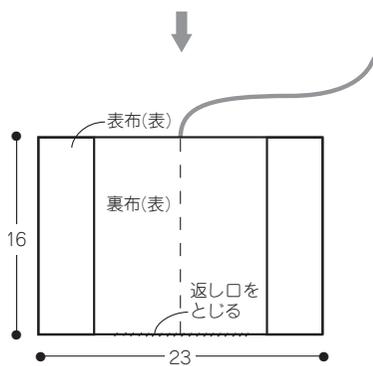
⑥ みんなで家庭科を



表布と裏布を中表に合わせて縫う。
縫い代は0.5~1cm。
耳であれば、0.5cmでじゅうぶん。



カバーの折り返し分4.5cmを
内側に折り込んで、アイロンで押さえる。
この折り返し分は、
4~6cmくらいの範囲であればOK。
しおり用のテープを挟み、
返し口を残して縫う。
表に戻して、返し口をとじる。



裏地は無地の赤い手ぬぐい。
黒いスエード紐を袷に。



袷紐は、手ぬぐいの色に合わせて。
紐の長さは20cmくらい。

◆ほかにも簡単に作れるアイテムいろいろ

◇手ぬぐいを二つ折りにして両脇を縫い、口を三つ折りにして縫って紐通しを作り、紐を通せば巾着になります。旅行のときの着替え入れなどに、手ごろで使いやすい大きさです。もちろん、切り分けて小さい巾着を何枚か作っても楽しいでしょう。

◇手ぬぐい2枚を縦に長く、折り伏せ縫いなどでつなぎ合わせ、両端の横糸を抜いてフリンジを作ればストールに。違う手ぬぐい2枚の組合せで作っても素敵です。もっと細かく切り分けたものをパッチワークしてもいいですね。

◇手ぬぐい2枚を横に並べ、上部10cmほどを少しだけ重ねて縫い合わせ、上下を三つ折りして縫えば、暖簾ができます。上は棒通しに、下は縫わずにほどこいてフリンジにしてもいいでしょう。

◇半分に切り分け、両端を三つ折りにして縫えばランチョンマットが2枚できます。もちろん、もっと小さく分割すればコースターも作れます。違う柄の手ぬぐいで裏地をつけてリバーシブルにしておけば、倍楽しめます。

◇手ぬぐいを横に見て、片方の長辺の両角に紐をつける、あるいは、両角にそれぞれボタンホールとボタンをつければ、エプロンになります。

◆ものを大切に使う心を

手ぬぐいは、江戸時代のミニマムな暮らしの知恵がぎゅっと詰まった布です。中身の伴わない「エコ」という言葉を濫用する風潮には抵抗があるので、あまり使いたくはないのですが、手ぬぐい自体が「エコ」そのものなのです。

さらに、「あずま袋」は、畳んでバッグの中に忍ばせておいても嵩張らず、海外の工場で縫製されて遠路はるばる運ばれてくるナイロン製の「エコバッグ」よりも、ずっと環境に優しいものです。

お気に入りの柄で自作のブックカバーを作って、本屋さんでかけてくれる紙製のカバーを断れば、ささやかながら森を守ることに繋がります。

どちらも、学生生活の中で毎日役立ててもらえるといいな、と思うアイテムです。そして、これらを自分で作って使うことで、手ぬぐいという小さな布が持つ大きな魅力を感じとり、長い伝統の中で受け継がれてきた日本文化の素晴らしさを発見し、ものを大切に作る心も育んでもらえれば、と願います。

◆おわりに

私ごとになりますが、洋裁、和裁、編物と何でもこなす母の影響で、小さい頃からものを作るのは大好きでした。しかし、正直言って家庭科の授業にはあまり楽しい思い出はありません(笑)。押しつけられた古くさいパターンを使って履きたくもないスカートを作るのがイヤで、ソーイング雑誌に載っていたスカートを勝手に作って怒られる、でも上手にできているので成績はいいという、先生にしてみれば扱いにくいイヤな生徒だったと思います。

けれども、幸いなことにそれで家庭科が嫌いになることはなく、縫ったり編んだりが好きなのはずっと変わりませんでした。いまはそれを仕事にさせてもらっていて、雑誌や手芸書に作品を発表してレシピを解説したり、自宅で小さな手芸教室を開いたりもしています。そんな立場になってみて、ひとに教えるのってなんて難しいのだろう、と痛感しています。みなさんもきっと日々いろいろご苦労されていることと思いますが、どうかめげずに、手仕事の魅力を伝えていっていただきたいと思います。

自分の頭と手を使って、好きな素材で好きなものを作り上げたときの達成感や、それを使う楽しさ、友だちに自慢したり褒められたりしたときの嬉しい気持ち、やがて人にも作ってあげたくなくて、作ってあげた人に喜んでもらえることの喜び、そういうことの積み重ねって、大人になるほど大切な気がします。辛いことや悲しいことに出逢ったとき、手仕事をすることで救われることもあり、私は縫ったり編んだりすることが好きな人間でよかったなあと、毎日手を動かしながら思っています。若い人たちには、ぜひ、若いうちから自分の手でもものを作る喜びを知ってほしいと思います。その入り口としても、手ぬぐいはとてもいい素材だなあと、今回このような機会をいただいて、あらためて気づきました。みなさんと一緒に「手ぬぐいで手作り」を楽しんでいただけたら嬉しいです。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

越膳夕香(こしぜんゆか)
北海道旭川市出身。雑誌編集者を経て手芸家・バッグ作家に。
雑誌や書籍に手作り作品とそのレシピを発表する傍ら、自宅アトリエにて手芸教室も主宰。
扱う素材は、布、糸、革などいろいろ。身につけるものは靴以外だいたい作る。
<http://www.xixiang.net>